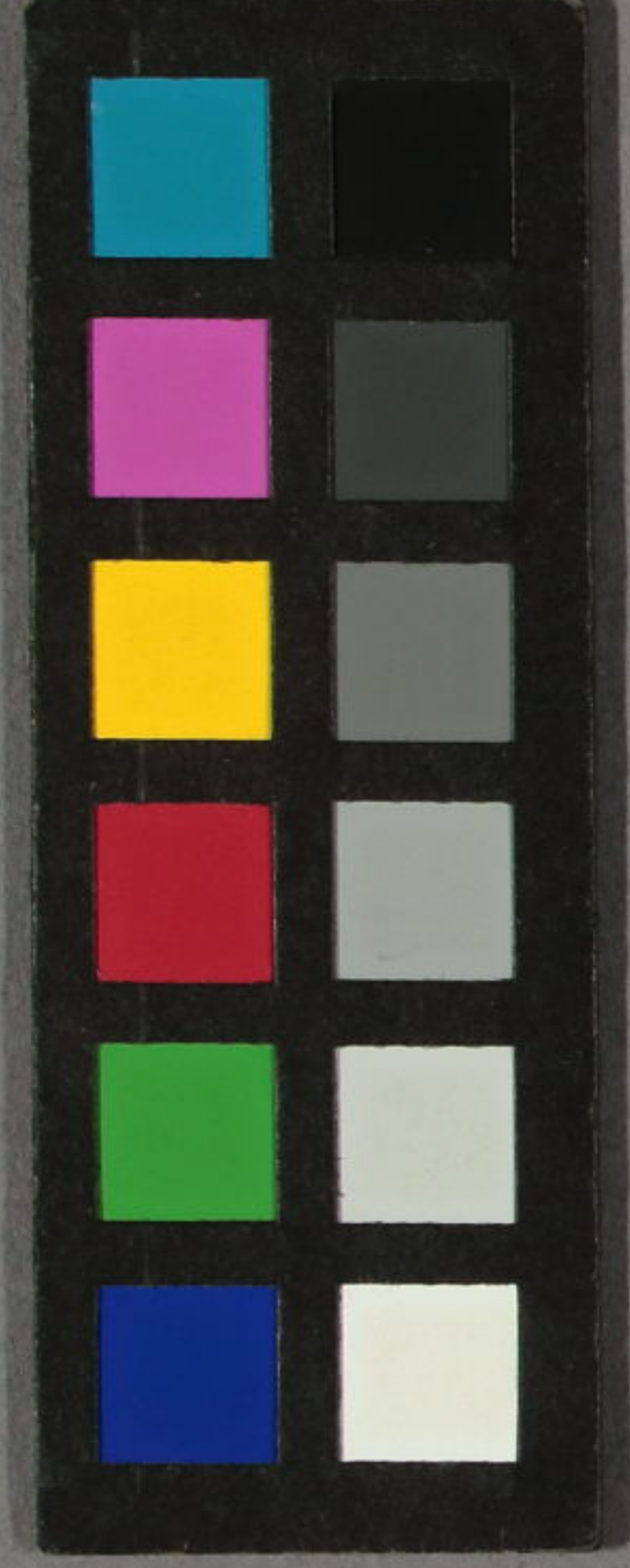


玉川白記二編下

^ 13
3188
6



こころや女のまて何れもあはれぬが。お前の如くとき
らう。学文をあるまじくしう。定めく孝經とやらも讀む
知ていひさるでもあらず。身が孝行の才一しりく内室を呼
でよそのかけは先祖の徳野をばぶとぬふのよすが
肝心やげさるま。とまじのまへに聞がよのは。は
ままがめりま。まじくやぐとみとやぐ。まじく
のふやへむ日頃う。篤実のまへのまじくやれう。
まじく外あまのめりま。とみまがめりま。まじくやれう。

たがまへにまじく子供にあまじくまじくまじく人な嫁
取の何を何からあつみあつしう思ひあつるのまじく
が必ずまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく
各右エ門まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく
来る時ハ実のまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく
為とまじく一日まじく二日まじくまじくまじくまじくまじく
まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく
まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく
まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく

ありしとてふ事。ゆゑ竟^{つゝ}は実^{じつ}いと一^{いつ}の天^{あま}切^{きり}のやう
 変^へりておまへ^{まへ}のきんぞの^{きんぞ}芽^めは^や堀^{ほり}兼^{かね}な^なく^くの^の人^{ひと}
 こそ^{こそ}おまへ^{まへ}の^の身^み代^{しろ}殊^{こと}お^おの^の縁^{ゆかり}は^はあ^ある^るか^かね
 えとや^や評^{ひやう}判^{はん}の^のう^うろ^ろく^くの^のむ^むす^すめ^めや^やげ^げま^まん
 ぢ^ぢ何^{なん}も^もお^おま^まへ^へ不^ふ足^{そく}な^な変^へり^りあ^ある^るま^まの^のか^かみ^みよ^よー^ーや
 又^{また}お^おま^まへ^へが^が外^{ほか}お^お思^{おも}ひ^ひく^くり^りな^なる^る人^{ひと}が^があ^ある^ること^{こと}で
 こそ^{こそ}や^やモ^モウ^ウお^おま^まへ^への^の身^み代^{しろ}向^{むか}ふ^ふの^の人^{ひと}も^もや^やと^とて^てお^おま^まへ^へ
 が^がお^おま^まへ^へと^と違^{ちが}ふ^ふや^やう^うに^にり^りな^なる^ること^{こと}と^とお^おま^まへ^への^の言^{ことば}

ありしとてふ事。ゆゑ竟^{つゝ}は実^{じつ}いと一^{いつ}の天^{あま}切^{きり}のやう
 変^へりておまへ^{まへ}のきんぞの^{きんぞ}芽^めは^や堀^{ほり}兼^{かね}な^なく^くの^の人^{ひと}
 こそ^{こそ}おまへ^{まへ}の^の身^み代^{しろ}殊^{こと}お^おの^の縁^{ゆかり}は^はあ^ある^るか^かね
 えとや^や評^{ひやう}判^{はん}の^のう^うろ^ろく^くの^のむ^むす^すめ^めや^やげ^げま^まん
 ぢ^ぢ何^{なん}も^もお^おま^まへ^へ不^ふ足^{そく}な^な変^へり^りあ^ある^るま^まの^のか^かみ^みよ^よー^ーや
 又^{また}お^おま^まへ^へが^が外^{ほか}お^お思^{おも}ひ^ひく^くり^りな^なる^る人^{ひと}が^があ^ある^ること^{こと}で
 こそ^{こそ}や^やモ^モウ^ウお^おま^まへ^への^の身^み代^{しろ}向^{むか}ふ^ふの^の人^{ひと}も^もや^やと^とて^てお^おま^まへ^へ
 が^がお^おま^まへ^へと^と違^{ちが}ふ^ふや^やう^うに^にり^りな^なる^ること^{こと}と^とお^おま^まへ^への^の言^{ことば}

三三川

三三



五
川
六

五

六

ませ何ぞ看とこしら入とせむ。最一ツおびまをう
 勝とせしうる後新深込郎へんるも。か糸
 膝ふすぶりのつき。深一。あーか糸さん。つうくが只
 一節あつうくめと。懃情あるか前のか詞ゆゑ。
 思ひまらまをぬとまお
 おま入道が嫁とよへの何のと桐窓のあまを還
 て世の中お私の目あつく女とりんかつてまをぬ
 思ひまらまをぬとまお

らふも何申とてかごごりまをせう。りりそのの養子
 として這家督とほげせ。松ハ髪とあつく隠
 居して世を樂く暮しとまごごりまは序の支お
 その支を爺さんや嘆えんおとろくおおひ
 まはト思ひこんぶる為体ふか糸も何と詮うと
 多く。諫めくわうるけ場の眞義まごごりまのま
 ずもくもすま。そ其日ハ余は支おまごごり
 吾家へこそハ立飯まぬ。○爰お堀兼を調布を
 調布を

家ともの得意な姿とる月本家の妙人高井
戸右エ門とりのあり表裏のりばら仁美と
内かく友達の曲者ふして殊の外なる好色も
ありしりし調布屋のか糸ふむをうけ何
卒した入るりやとり下ひゆむとそとふり
親しく調布屋へ来りも其を深実お世話しけれ
ハ糸もそととをなつて只頼母しき人なりと
思ふものうろ戸右エ門が来るごとく酒をい

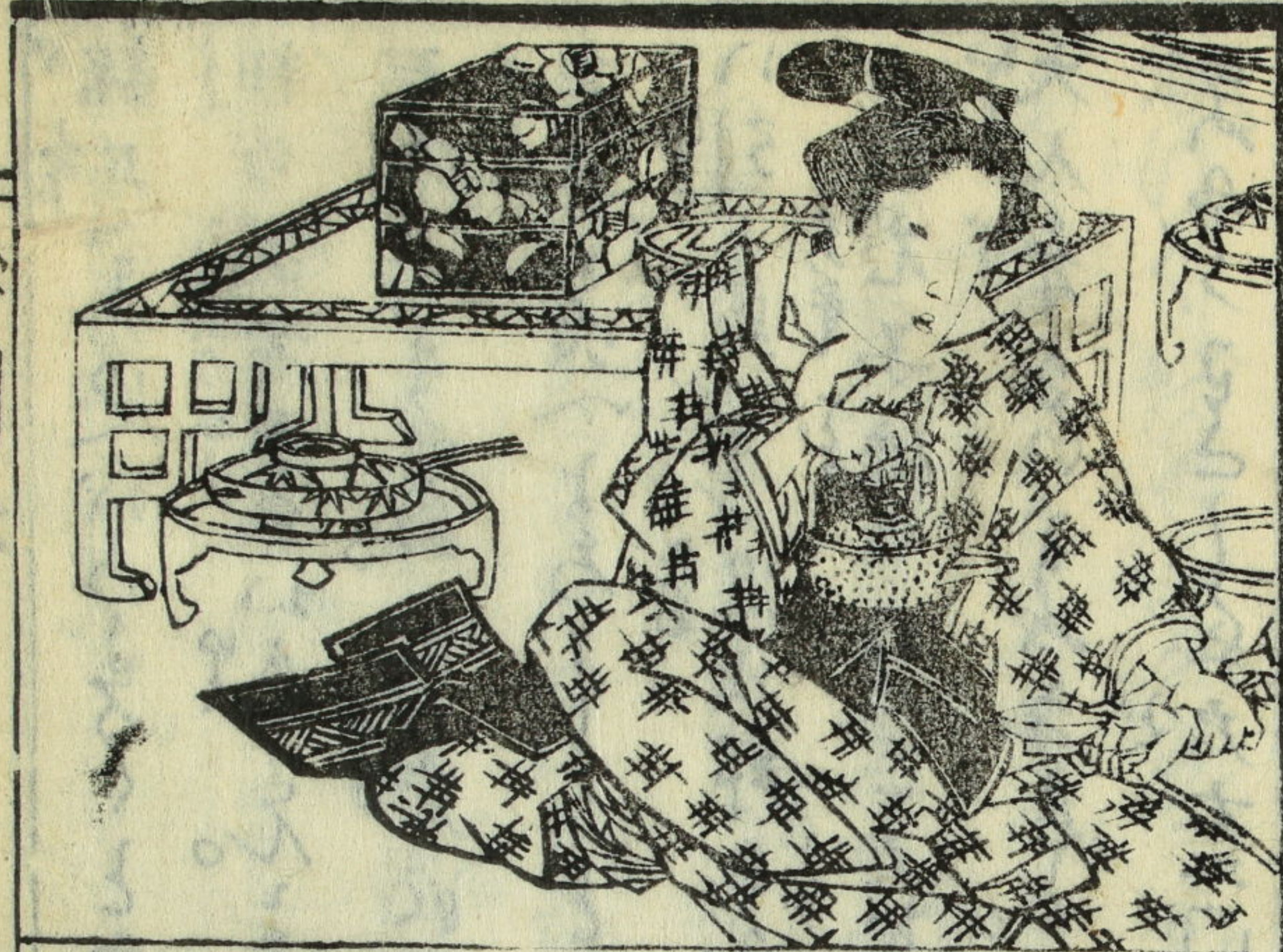
馳走奔走ひとりとうとぬふ戸右エ門ハ禮ふ
あひ糸吾むむを推して集もそと水あつと
かもの物るは斯くハ他り多く管待きらめと自
鳴のゆらゆらもや吾物と竊ふよるとび或日玉川
小舟と較て澳せんとか糸とさそひけるふ糸ハ
まるとそのまねとも大更の出入屋敷の更なる
詮方なく金井橋の船病へゆれと足色ハ戸右エ
門ハ爰お待居てそとより船へ酒肴を入させ

乗いご一網とくを鮎と取りさるる身と僅
 蓮光寺の境内なる植木屋といふ割烹家へおを
 つけとせあがり座敷へさ入り又一献とせ世の中の
 雑談も笑ひし奥でござるおろろ隣の紙門のすだめ
 ようとさういふとさうのどく者ありか糸戸左門ハ
 何ゆゑくこの人とお見え合するにこそ別人さう
 堀兼屋の深沢郎よりさういふくわく戸たぬも
 中々とさういふさういふさういふ誰りと思つれば

堀兼屋の息子あんなのかりるくく寤る居る
 聞かば早速全快てよの何事もあらずぬれ
 りるまのいさ。さういふとさういふ這入がよのとり
 深沢郎の紙門をゆけ。さういふとさういふ戸たぬ
 お糸さな。さういふお樂。さういふおま。さういふ
 から倍氣ら。さういふお糸が耳への圓ゆきと戸を
 門のゆもつら。さういふお糸も女の身であの
 家とさういふ居るまのいさ。さういふおま。さういふ

せめくちりつとに保養でもあり命もせいら
ほくまのくそこでもまが護りての涼も細と
うこせく取と鮎サくこつとすくひら
深沢郎一ハイのりぐさうごさう
分があつてぐさうのませぬゆゑもあつて母が
すくまきと船へまき一が主管の信助とさ
ひらひらも刺さるくは酒もさうなりとさく
いませめんごが丁度折とくぬらこがさふ。お目
お

鏡のまきとトりのよかあも清く
おま入病糸のびおあえまり夜風あめら
ころころめと入早くお飯りトりのふ戸右エ門一
今の若さあめんまり因にさうりりら。それ
病糸もゆるは三糸が窪へでも連と行く
一ツ吞ぶがよのト益とさひふそまてうり三人さひ
おま入つ吞野へ戸右エ門が家来慌しく走り
「旦那さあこれおまはさうされまき。西同役の



ますよめが。どんり
 縁りおまへさんい免く
 こころと強ひくちり
 せし先刻のよめ
 飯色えぞくぢり
 まはがこころへ又ぢぞ
 ちりもの内でもおまへさん
 傍りいふと思ふ何
 何ぞ

因果
 因果
 因果



おまへさんい免く
 のよめ山僧のりい
 取ゆげてもさくらぬ
 舌ハ調法ありの
 舌ハ調法ありの

高井さぬの物づくしのか方そのう入夫の通人どりの
 更りこころが家と世具負かきとましくんぞとて
 何更ふよしと派切あか世話あかきとましくんぞとて
 入夜家の世家老さぬと世由今夜らぬえまの
 すまねど詮方うにまこのものと何ぞとけの
 よふよりの世しんや口惜しとてくまのまね
 元ぬゆがけさくが割くおま入ふんせつと身と
 するとして無後深沢郎の娘らより。お糸が真から

おとが。あつてのりさどおや又高井ととけのあつた
 お疑ふ心の思知よりも。ひぞる詞を聞かひる。お糸
 が切ある誠心とましくおゆと。面目なく。お糸さん
 真平は免うなれませ。おま入の真しのかけらとん
 て居わがう。今のおよみ更とやとて。とてくが存
 遠ひとてまこととての願ひとらうとて。とてす
 可愛か方を入し悪くひとせらも本意からず
 きて二個さしひるど居ると。竟ん夫の浅様とて。

病世の對りとい言やうら。斯る美しき人ふ羨慕
 ころを。すげのふして其後ふるはも野暮のりて
 多う。世あへまのめる方あへく小夜衣の丈とくさぬ
 るも有るさくひあるに泣く吾はまもなく深沢郎
 も妻もるさきまをいげよや乱離の人とさるとも。
 此人さくふりともを。嫁く迷ひとひこらそ金く
 るに。深ゆが。執念くさる業さるけん深沢郎ハ
 暫しと。糸。なふとんさふ二人さうら等もさる居る

野へ高井さるがわうらりさうら何とも思召まうい
 のでもさの早く衣服でも着てらまもさうとさん
 さするとも。何のよらとやさるのらとサ除さん
 愛へさくくさるうらさうら脊中をらうらつとつを
 ちさうとさるして男もせんうさく。後人ありて袖に
 よら。さうら。さうら。糸。さうら。さうら。まうら。一
 り。さうら。さうら。さうら。さうら。相違のさるれば
 然らうら。さうら。さうら。さうら。胸さうら。さうら。さうら。

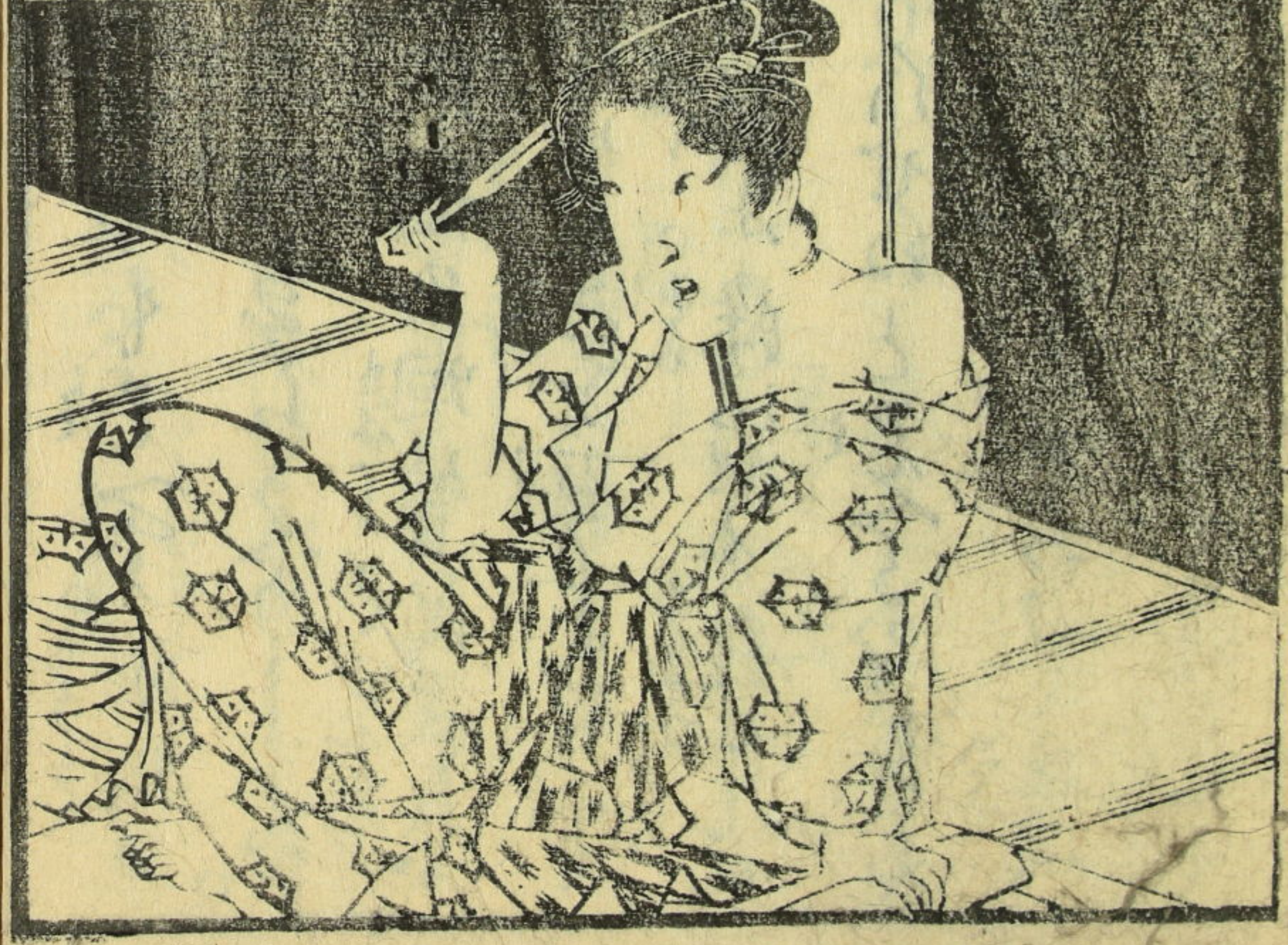
三玉川六

十五

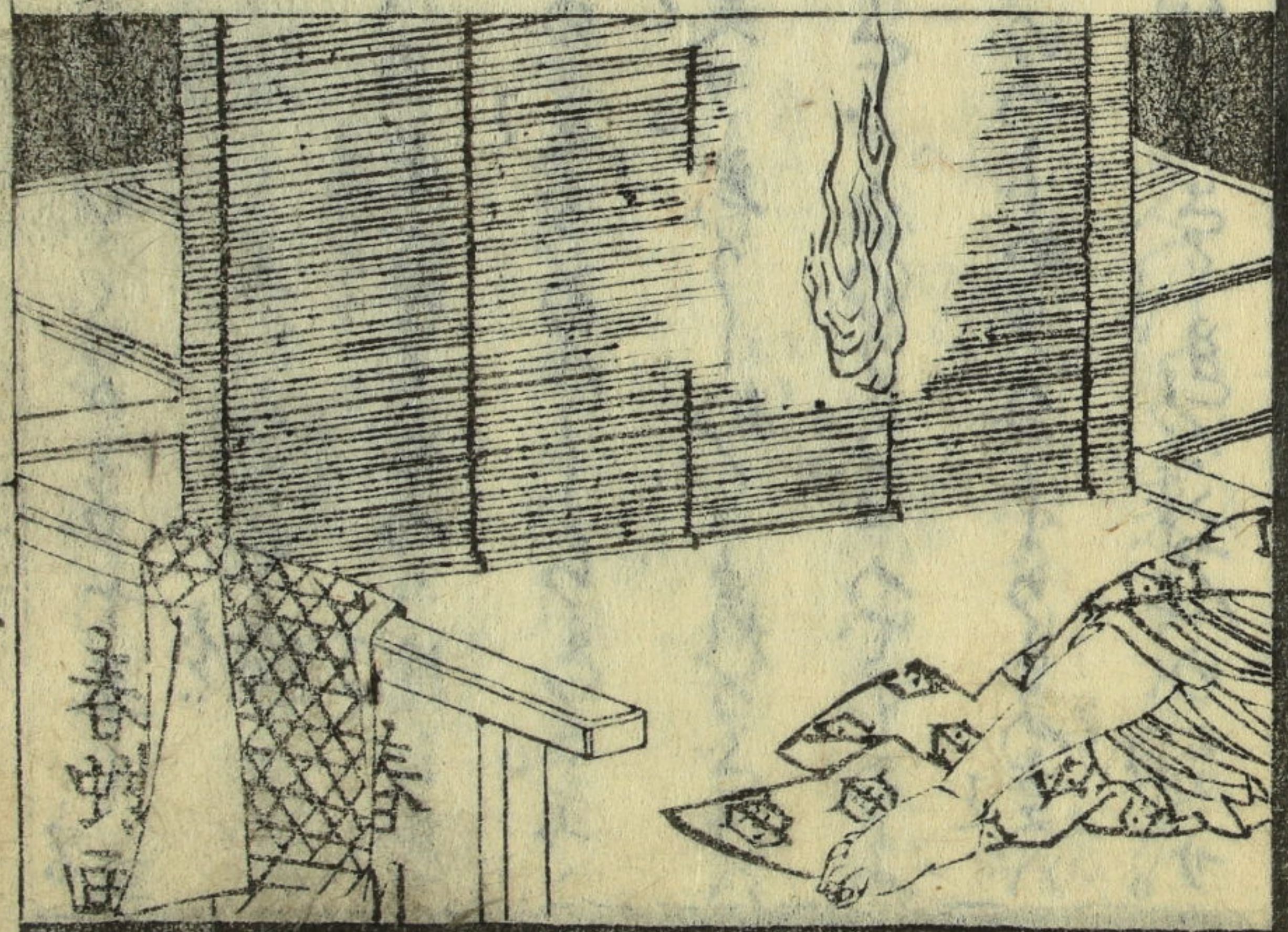
とまのりだ居りうらる。お糸の多をひそめつゝ
深え高井さるのの返りもいらぬうち。ちゆうと
一座へ 漆 一りてまよるう 一よひりあたる
とまてふぶくし一問へりりたる實や遠く近
きものへ 男女のあつと情女が詞うべなるまの
さてもき高井戸右エ門の同役の用莫もとらへ
あまひ今夜とも豫ての望とまをけたやと家隸
と久し一急ぎ植木屋へ来てるに杯盤狼藉と

あつてまうはく。お糸も漆乃郎もえず。燭の
火も出るた。さていもや二個あつらへりしあや。
客廳あわがりんまは俳編緬の相管向天民が
書一扇もあつた戸右エ門のとまをとりあげ
とらあつたこれお糸がませつる 扇お漆乃郎が扇これが
暖あわのうらひまごうのいせぬとんえつ。やとらあ
庭へ出く涼んででも居るやとあつととらへ
おりててとらあつととらへりてとらあつととらへ

家の方ひびくにかき入りの新
ごまなるのするに何者あやと
ゆき杖足あのくし耳ととをとぞ
ま聞バ正しく深次郎とも糸
かまねとおがあとて「モシ
さても斯のあるうくハ身が
ち遠日あがぞんぞんあのがモ
おまえの女房ごうら外お



変けして浮きるままとか
いとはらららららららららら
あのいままのとらららら
まいのりやらららららら
ひのいおとトつけて斯のまま
あのいままのいままと人が笑
あのいままのいままと誰が何といふあとま
あのいままのいままと婦あららららららららら



五十一

春中田

今でこそそいひゆゑがモウ十年も
ては覽^{ごらん}こころのモウ五十近くあつたらや嫁^{むら}アに
あつたあま入^いはまご廿五六の若^{わか}盛^{さか}つごころ捨^{すて}らま
そらままごと思^{おも}つと末^{すえ}のまがゆえとらま。ま
後^{あき}まそらあつせん時^{とき}のまサあつかくたつごけ
くしてゆゑいまはあつごころあつたあま
いふ何^{なに}も同^{どう}男^{なん}をまごころいふあつたあま
あつたあまと只^{ただ}入^いあ後^{あき}ゆびとさつあつたあまのまサ。

高井^{たかい}さるが今^{いま}でもういふ来るこころの
うらまはあつたあまに往^{むか}くゆゑとさつあつたあま
窓^{まど}の間の一間^{ひきま}のうらまも。お糸^{いと}の源次郎^{げんじらう}が
を引^ひつ。この様^{よう}あつて来るまごころ「コトサマ
あつたあまよつたあま水鉢^{みづはち}あつたあまのあつたあま
髪^{かみ}をうまあつたあま。始^{はじめ}終^{しまひ}とあつたあまのあつたあま
色^{いろ}うらまはあつたあまとせれたあつたあま。この這^は奴^{やつ}等^らあつたあま
の回^{まわ}り密^{ひそ}通^{つう}してあつたあま。斯^{かく}してあつたあま

も吾^{われ}の糸^{いと}と口^{くち}説^せつりとも^{とも}ひみ^{ひみ}のあ^あご^ごう^うのま^まい^い。
りり^{りり} 渠^ちの^のに^に 落^お度^とと^とあ^あし^しせ^せ西^{せい}家^けとも^{とも}お^お喜^き愛^{あい}
目^めふ^ふの^の口^{くち}後^ご那^なう^うせ^せく^く腹^{はら}り^りん^んと^と客^{きやく}廳^{てい}へ^へも^も立^た
ま^まう^うす^す直^ちふ^ふ勝^{かつ}ま^まへ^へ立^たま^まり^りて^て大^{だい}ぶ^ぶく^くび^びと^とま^まの^の
ま^まの^のい^いと^とび^びす^すま^まの^のれ^れして^{して}ま^まの^のあ^あら^らの^の年^{ねん}竟^{けい}高^{こう}井^い什^じ磨^ら
る^る交^{かう}討^とと^とん^んど^どこ^こして^{して}堀^{ほり}兼^{けん}屋^や調^{てう}布^ふ屋^やの^の西^{せい}家^けと^と皆^{みな}
り^りや^やと^とら^ら下^げ面^{めん}の^の分^{ぶん}解^{かい}も^も春^{はる}宣^{のたま}久^{ひさ}し^しの^のい^いの^のい^い。
玉^{たま}川^{がわ}日^ひ記^ぎ卷^{まき}之^の六^む終^{つひ}

備書 音成

